大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

文学教育に創作文執筆を取り入れる試み、どのように「オチ」は小説を劇的にするのか？：ギ・ド・モーパッサン「首飾り」('La Parure', 1884)をめぐる学生との議論を通じて

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-04-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉田, 大輔
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007517

文学教育に創作文執筆を取り入れる試み、どのように「オチ」は小説を劇的にするのか？ ――ギ・ド・モーパッサン「首飾り」(‘La Parure’, 1884)をめぐる学生との議論を通じて――

吉田大輔＊

How Novel Endings Make Stories More Dramatic：A Discussion on Guy de Maupassant's ‘La Parure’ with Students

YOSHIDA Daisuke

要旨

本論は、創作文を学生に書かせる試みを文学教育にどのように取り入れるか、またそれによってどのように授業を活性化させるのかを、具体的な報告を通じて検討しようとするものである。2017 年度、大阪府立大学工業高等専門学校・本科 4 年生の選択科目「言語と文化」において、筆者が行った授業を事例として報告する。本論で取り上げる授業では、ギ・ド・モーパッサンの有名な短編「首飾り」を教材とした。いわゆるどんでん返しの「オチ」を持つ短編小説(物語の最後で前提が覆される小説)の典型である。授業では、作者による叙述の操作によって「オチ」がつくられていることを教えようとした。まず、学生に「首飾り」の結末部を隠したまま、「オチ」を創作させ、各受講者の創作文を全員で読みあった。そののちに、作者・モーパッサンの書いた本来の結末を明かし、学生と議論した。また、「オチのある話」とはなにかを定義する文章を書いてもらい、ふたたび議論した。さらに発展として、①シャルル・ペロー「サンドリヨン」(シンデレラ) との差異から「首飾り」を検討する、②アリストテレス『詩学』の一節などを参照しながら「オチのある話」を考察する、というような展開をした。このような実践を通じて、教師(筆者)も、学生も、「首飾り」という小説についての理解が深まり、「オチ」をめぐって具体的で活発な議論を行うことができたと考えている。

キーワード: 文学教育、創作文、「オチ」、ギ・ド・モーパッサン、「首飾り」

１．はじめに

小説を教材とするとき、どのようにそれを用いれば、授業をより活発で愉快なものにできるのだろうか。また、教師・学生ともに知的刺激を与えあうような文学教育は、どのような工夫によって可能になるのか。端的に言って、文学の授業をもっとおもしろくするにはどうしたらいいのか。

筆者は、学生に創作的な文章を作文させることが有効な手段になりえる、と考えている。本論は、こうした考えに基づく実践を具体的に報告することを目的とする。

本論で事例として取り上げるのは、筆者が 2017 年度に担当している、大阪府立大学工業高等専門学校・本科 4 年生向け選択クラス「言語と文化」の授業の一部である(高専本科 4 年生は、大学 1 年生に相当する学齢)。

この科目を 2017 年度にはじめて筆者は担当することになったが、シラバス作成に際しては、授業で扱う対象を「短編小説」にした。短さが精読に向く、1 年間の授業を通じて多くの作家の作品に触れさせることができる、などの理由による。

授業の到達目標のひとつを、「短編小説を「技術」と「構造」の観点から読解できるようになり、かつ自らも部分的には実践できる力を育成すること」と設定し、シラバスに明記した。また、「授業概要」には、次のように書いた。「「なにが」書かれているかという主題の問題と同じくらいに重要な「どのように」書かれているのかという方法の問題を意識して読む態度を教授することを目指す。小説技術への理解を深めるために、本授業では受講者に創作文を書いてもらう試みも取り入れたい」。「授業概要」の後半部、「小説技術への理解を深めるために、本授業では受講者に創作文を書いてもらう試みも取り入れたい」と書いた部分を、具体的にどのように実践したのかを以下、示していく。

2017 年 8 月 21 日 受理

＊総合工学システム学科　一般科目　非常勤
(Dept. of Technological Systems: General Education)

２．当該授業の実施時間

2017 年 4 月から 5 月にかけて、後述の「４．指定教科書ならびに当該授業に至るまでの展開」において述べる導入を行い、6 月から 7 月にかけて、8 時限(1 時限 45 分)を用いて、モーパッサン「首飾り」を扱った。「言語と文化」は、毎週 1 度、2 時限連続の時間割なので、90 分の授業を 4 回行った、と言ったほうが実感に近い。よって、後述の「７.授業展開」では、45 分×8 回ではなく、90 分×4 回の授業として報告する。

３．受講学生

前述した大阪府立大学工業高等専門学校本科の 4 年生から、20 名のクラスを受け持った。大阪府立大学工業高等専門学校本科には、機械システム、メカトロニクス、電子情報、環境物質化学、都市環境の 5 コースがあるが、受講学生がいずれかのコースに偏らないよう調整されているので、各コースからまんべんなく受講者があった。筆者は、2014 年度より、3 年生向けの国語の授業を毎年 1 クラス担当しており、昨年、国語を担当した学生のうち、幾人かが履修してくれた。授業開始当初から見知った顔もあり、開始当初から和やかな雰囲気で授業は展開できていた。また、総じて学生の意欲は高く、発言を求めても積極的であり、総合的に見た国語力も高い。

４．指定教科書ならびに当該授業に至るまでの展開

本授業では、松本和也編『テクスト分析入門　小説を分析的に読むための実践ガイド』(ひつじ書房、2016)を教科書に指定した。同書には、構造的・技術的な小説読解の要点が、具体的かつコンパクトにまとめられている。

4 月から 5 月にかけて行った展開は、次の通りである。

初回の授業では、千野帽子『人はなぜ物語をもとめるのか』に依拠しつつ、小説を含むフィクションを支えているのは因果律である、ということを話した。二つ以上の出来事を認知する際、人間は、因果律による理解を志向する傾向があり、それこそが「おはなし」の源泉である、と説明した(1)。また、千野の同書にも引用されているが、フォースター『小説の諸相』を引き、(フォースター的な意味での)「ストーリー」と「プロット」の差異も説明した。フォースターの定義によれば、出来事と出来事とが因果律によって結ばれていないものがストーリーであり、複数の出来事が因果律によって結びつけられたものがプロットである。フォースターが挙げている有名な例で言えば、「王が死ぬ」「王妃が死ぬ」というふたつの出来事が、「王が死に、それから、王妃が死んだ」というように、単に時系列的な前後で結ばれれば「ストーリー」であり、「王が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ」というように、先行する出来事と後発の出来事とが「原因と結果」として結ばれれば「プロット」である(2)。

次に、前述の教科書を適宜用い、人称や視点といった小説技術のごく初歩的な解説を行い、現代グアテマラの作家・エドゥアルド・ハルフォンの短編小説「彼方の」(3)を学生と精読した。「彼方の」は、短編小説を読むクラスを舞台とした、いわば「大学小説」であり、短編小説の歴史そのものが高度に二次創作(パスティーシュ)されたような作品である。授業に際しては、この小説内部で直接に言及される先行作品、エドガー・アラン・ポオ「黒猫」やジェイムズ・ジョイス「小さな雲」(『ダブリンの市民』の一篇)といった作品もあわせて精読した。ハルフォン「彼方の」の細部が、それらの先行作品をどのように利用し、書き換えようとする試みであるかを強調して講義し、具体的な作品読解の例を学生に示した。たとえば、ポオ「黒猫」における片目を傷つけられる猫と、「彼方の」に登場する学生・カレルの頬にある「紫色の大きな傷跡」とが、「顔の片側を傷つけられる過去」という意味で対応していることや、ジョイス「小さな雲」の主人公・チャンドラーの妻の名・アニーが、「彼方の」に登場する女子学生の名として「引用」され、かつ服装(「ブルー」の「ブラウス」)も「引用」されていることなどに詳しく言及した。「彼方の」という作品が魅力的だったこともあり、学生は概して楽しく授業に参加してくれたように筆者には見えた。また、「彼方の」は先述のように短編小説を読むクラスを舞台とした小説なので、小説内部の登場人物の行為(ポオの「黒猫」やジョイス「小さな雲」を教師と学生が読む)を学生に追体験させるような効果も持ち、その点も学生は楽しんでいたように筆者には思えた。

授業で小説の文章を読む際には、教室の机をすべて教室後方に下げ、椅子のみで車座になり、学生各自にひと段落づつ音読してもらい、そこに解説を加えていった。

まとめれば、今回報告する授業に至るまでに、学生は、ごく初歩的な小説技術の解説を受け、なおかつ、①ハルフォン「彼方の」、②ポオ「黒猫」、③ジョイス「小さな雲」という三つの短編小説を、約 2 か月かけて、具体的に精読したことになる。ただし、それらを講じる際に、なんらかの「創作文」を書かせたわけではなく、創作文を書かせる試みを取り入れたのは、ここに報告する授業がはじめてである。

５．教材

ギ・ド・モーパッサン(Guy de Maupassant, 1850-1893)の「首飾り」(‘La Parure’)は、1884 年、新聞『ゴーロワ』に掲載された。明確な「オチ」のある短編小説の模範として、今日でもよく言及される作品である。

まず、「首飾り」のいわゆる「オチ」について述べよう。かなり簡略化して言えば、この小説の「オチ」は次のようなものだ。さして裕福ではない夫人が、ある夜会のために友人から高価なダイヤモンドの首飾りを借りるが、それを紛失する。よく似た首飾りを購入して友人に返却するために、夫人とその夫は、莫大な借金を背負う。そして、借金の返済のために 10 年間、非常な苦労をする。借金を返し終わったのちに、街で偶然、夫人は友人と再会し、その事実を告白する。しかし、友人からその首飾りが実はダイヤモンドではなくにせものだったことを告げられる(莫大な借金を背負うほどの価値はとうていないものだった)。この結末部が「首飾り」のオチである。

物語は、古典的な語彙を使えば、三人称多元視点の叙述によって展開されていく。

より詳しく作品内部をおさえておこう。作中の主要登場人物は、次の三名である。

①マチルド・ロワゼル(ロワゼル夫人) → とても美しいが、平凡な文部省の役人と結婚し、現状に満足していない女性。

②マチルドの夫(ロワゼル氏) → 文部省の平役人。心優しいが、現状に満足しており、野心はあまりない。

③フォレスティエ夫人 → ロワゼル夫人の少女時代の友人。裕福な暮しを送っている。

続いて、読者へ伝達される情報の順序を、作者・モーパッサンがどのように統御して「首飾り」という作品を書いているかを整理してみよう。そのために、前述のフォースターの定義から少し離れ、ここでは、ロシア・フォルマリズムの理論家、トマシェフスキーのプロットとストーリーをめぐる定義を援用する。繰り返すが、『小説の諸相』でフォースターは、フィクションにおける複数の出来事の時系列的前後関係を「ストーリー」と呼び、出来事の因果律的連結を「プロット」と呼んでいた。それに対して、トマシェフスキーは、「ファーブラ」(ストーリー)「シュジェート」(プロット)を次のような意味で用いる。すなわち、「ファーブラ」(ストーリー)を、フィクション内部で、情報が読者に伝達される順序ではなく、時系列的にフィクション内部の出来事を整理したものだとし、他方、「シュジェート」(プロット)をフィクション内部の出来事が読者に伝達される順序(叙述によって操作された順序)、という意味で用いた(4)。

「首飾り」における、トマシェフスキー的な意味での「プロット」(叙述の順序)を詳細に整理すれば、次のようになる。

①固有名を明かされないまま、美しい女がいたことが読者に示される → ②だが、資産を持たなかった彼女は文部省の平役人(彼もこの時点では名前を明かされない)と結婚した → ③贅沢をする権利が自分にはあると考えていただけに、生活に満足せず、彼女は贅沢を夢想する → ④彼女は「宝石」が大好きで、「人にちやほやされ」たく思っている → ⑤彼女には「修道院付属の女学校時代の友人」(彼女の名前もこの時点では示されない)がおり、彼女とは対照的に裕福な生活を送っているので、あまり会いたくないと思っている →

→ ⑥ある日、夫が文部大臣が主催する夜会の招待状をもらって帰宅してくる(この招待状に記された文章で、はじめて、この夫妻の姓が「ロワゼル」であることが読者に明かされる) → ⑦ロワゼル氏は、妻が喜ぶと思ってそれをもらってきたのだと言うが、ロワゼル夫人は喜ばず、泣き出してしまう → ⑧衣装がないから、夜会にはいけない、という感情をロワゼル夫人は夫に吐露する → ⑨夫は衣装はいくらくらい出せば買えるものなのかと夫人に問う(ここで描写される夫の会話文によって、はじめて読者は、ロワゼル夫人の呼び名が「マチルド」だと知る) → ⑩ロワゼル夫人は、妥当な額を計算しつつ、「400 フランもあれば」と夫に伝える → ⑪猟銃のために夫が貯金していた金額がまさに 400 フランであり、夫はその金でドレスを買うように言う →

→ ⑫(どのようなドレスを買ったのかという情報は省略されたまま)夜会の日が近づく。だが、夫人はふたたび、悲しげな様子を見せる → ⑬夫人は、身につける「宝石」がないことを悲しみ、夜会に行くのをやめようかとまで言う → ⑭夫は花を挿して行けばよいじゃないかと提案し、今の季節なら 10 フランもあれば、素晴らしいバラが 2、3 本買えると言う → ⑮妻はその提案を拒絶する → ⑯夫は「フォレスティエさん」に宝石を借りるよう頼むことを提案する(ここではじめて、裕福な「修道院付属の女学校時代の友人」の現在の姓が「フォレスティエ」であることが読者に明かされる) → ⑰翌日、ロワゼル夫人はフォレスティエ夫人のところへ行き、宝石を借りたいと伝える → ⑱フォレスティエ夫人は、それに快く応じ、自身の所有する宝石の中から自由に選ぶようロワゼル夫人に言う → ⑲ロワゼル夫人は、多くの宝石の中から「素晴らしいダイヤモンドの首飾り」を見つけ、それを借りたいと伝える → ⑳フォレステ

ィエ夫人はふたたび快く応じ、ロワゼル夫人は喜んで「逃げるように」家へ帰る　→

→　㉑夜会の当日となり、ロワゼル夫人は、多くの男を魅了し、彼らと踊り、夢のような時間を過ごす　→　㉒朝の 4 時ごろ、夫人は会場をあとにする　→　㉓(夜中の 12 時以降は別室で夫は眠っていたことが時系列的遡行によって述べられたのちに)夫は妻にコートをかけてやろうとする　→　㉔夫は妻の肩にコートをかけてやるが、そのコートが普段着のみすぼらしいものだったので、ロワゼル夫人はその場を逃げ出したく思う　→　㉕夫は辻馬車を探すが、うまくつかまえられず、夫婦はさむいなかを震えながら歩く　→　㉖ようやく拾った馬車で、ふたりは自宅へもどる　→　㉗家の鏡の前で、コートを脱いで夫人は悲鳴を上げる　→　㉘かけていたはずの「あのフォレスティエさんの首飾り」がどこかへいってしまっていた　→　㉙ふたりは探し回るが、部屋や着衣のどこにもそれが見当たらない　→　㉚乗った辻馬車の番号も覚えておらず、馬車の中を探すこともできない　→　㉛夫・ロワゼル氏は、帰り道をふたたび探すために外へ出ていくが、夫人はぐったりしたままであり、朝の七時頃、なにも見つけられなかった夫が戻ってくる　→　㉜夫・ロワゼルは、警視庁にも行き、新聞広告も打った　→　㉝一方、ロワゼル夫人は、ただ 1 日中、気が動転したままなにもしないでいた　→　㉞夕暮れ、なにも発見できなかった夫が戻ってきて、ロワゼル夫人に、時間稼ぎのため、首飾りの留め金が壊れたので修繕に出した、というフォレスティエ夫人宛ての手紙を書くように言い、夫人はそれに従う　→　㉟(小説の時間は 1 週間省略されて進み)、なくした首飾りの代わりのものを見つけるために、宝石箱の箱書きをたよりに、宝石商のもとに夫婦は訪れる　→　㊱だが、夫婦が訪ねた宝石商は、ただ箱を売っただけであり、首飾りは売っていないと言う　→　㊲夫婦は、なくした首飾りに似たものを探してほうぼうの宝石商を訪ね歩く　→　㊳パレ・ロワイヤルの宝石商で、なくした首飾りにそっくりなものをみつけ、宝石商に 40000 フランの値を 36000 フランまでならまけてもよい、と言われる　→　㊴夫婦は、その首飾りを 3 日間人に売らないこと、また 2 月末までにもとの首飾りが見つかったら 34000 フランで下取りしてもらうことを宝石商に約束させる　→　㊵(さかのぼって明かされる事実として)夫・ロワゼルが父親の遺産 18000 フランを持っていることが示され、首飾り代 36000 フランの不足分(つまり残り 18000 フラン)をあちこちから借金し、首飾りを購入する　→　㊶ロワゼル夫人がフォレスティエ夫人のもとへ首飾りを返却しにいくと(厳密には、違う首飾りに代わっているので「返却」ではないが)、フォレスティエ夫人は、気を悪くした様子でもっとはやく返してほしかったと告げる　→　㊷フォレスティエ夫人は、そう言いながらも、宝石箱をあけてそれを確かめようとはしなかった　→　㊸首飾りを確かめないか内心びくびくしていたロワゼル夫人は内心ほっとする　→

→　㊹それ以降、借金を返すことを決意したロワゼル夫人は、女中に暇を出し、屋根裏部屋へ引っ越した　→　㊺ロワゼル夫人は、台所仕事、洗濯、ごみ出しなどを自分でし、「下層階級の人間のようなり」をして、自ら買い物へ行き、とぼしい金を節約するように暮らした　→　㊻夫・ロワゼルは、役所仕事ののち、夕方から商店で帳簿をつけ、夜は筆耕の仕事を 1 ページ 5 スーの金額で請け負った　→　㊼(「こういう生活が 10 年間続いた」と 10 年間の生活は省略され)10 年がたち、借金を無事返しおえたころ、ロワゼル夫人は、老婆のような見た目になっており、性格からも優美さが失われたさまが描写される　→　㊽だが、夫が留守の折などには、窓辺に座り、自分があんなにもちやほやされたあの夜会のことを思い出し、あの首飾りをなくさなかったらどうなっていただろう、人生はほんの些細なことで変わっていく、とロワゼル夫人は思う　→

→㊾ある日曜日、シャンゼリゼ通りを歩いていると、子供づれの、昔のように若々しく、なまめかしい、フォレスティエ夫人をロワゼルは見つけ、一瞬の逡巡のうちに話しかける(ロワゼル夫人の呼びかけによって、フォレスティエ夫人の愛称が「ジャーヌ」であることが読者にはじめて示される)　→　㊿フォレスティエ夫人は、下層階級の女になれなれしくはなしかけられたと思い、それが誰だかわからない様子なので、ロワゼル夫人は自ら名乗る　→　51このような見た目になってしまったのは、フォレスティエ夫人のせいなのだとロワゼル夫人は言い、首飾りの紛失の顛末をはじめてフォレスティエ夫人に告げてしまう　→　52ロワゼル夫人は、誇らしげににっこりと笑う　→　53フォレスティエ夫人は、動転した様子でロワゼル夫人の両手をつかみ、あの首飾りが 500 フラン程度のにせものであることを明かしてしまう

以上が、「首飾り」のプロットである。次に、「首飾り」にける、トマシェフスキー的な意味での「ストーリー」(フィクション内部の出来事の時系列) を、やや簡略化して示す (モーパッサンの「オチ」をめぐる叙述の操作で特に重要な部分を太字にし、下線を付した)。

①未来のロワゼル夫人であるマチルドと、未来のフォレスティエ夫人であるジャーヌが少女時代、学校で友人

になる　→　②マチルドが平凡な役人である夫と結婚し、「ロワゼル夫人」となる　→　③夫が夜会の招待状をもらってきて、400 フランの服を買う　→　④宝石をフォレスティエ夫人から借りる（**この首飾りがにせものであることは、ロワゼル夫婦と初読の読者は知らない、作者とフォレスティエ夫人は知っている**）　→　⑤夜会へ行き、夢のような時間をロワゼル夫人は過ごす　→　⑥首飾りをなくしたことに気づき、かわりの首飾りを 36000 フラン(うち半分は借金)で購入し、フォレスティエ夫人にそれを渡す（**首飾りが別のものになったことは、ロワゼル夫婦、読者、作者は知っており、フォレスティエ夫人だけが知らない**）　→　⑦借金をかえすため、夫婦は10年を費やす　→　⑧ロワゼル夫人は、フォレスティエ夫人に真相を告げる（**はじめてフォレスティエ夫人はそのことを知る**）　→　⑨フォレスティエ夫人が、あれはイミテーションだったと告げる（**ロワゼル夫人と初読の読者ははじめてこのことを知る**）

以上、「首飾り」のトマシェフスキー的な意味での「プロット」と「ストーリー」を整理してきたが、これまでの整理によって確認できるように、「首飾り」の「オチ」は、大つかみに言って、ふたつの叙述の操作によってつくられたものである。

それは、①貸し出されたダイヤモンドの首飾りが、ほんものではなくにせものであることを故意に最後まで明かさないこと、②前半では三人称多元の叙述を活用し、フォレスティエ夫人の内面描写もあるものの、後半（プロットの整理番号で言えば㊹以降)、「オチ」に奉仕するために、ほぼロワゼル夫人の視点で展開すること、の 2 点である(プロット整理番号㊿のように、後半でもロワゼル夫人以外の内面が描かれないわけではないが、首飾りがにせものであったという核心には触れないように書かれる)。

モーパッサン「首飾り」を、鮮やかな「オチ」が光る短編小説の模範と評価するか、むしろ、「オチ」が決まりすぎており通俗的な作品であると評価するかは、意見の別れるところだろう。後述する夏目漱石のように、後者に傾いた評価をする者もいた。

モーパッサン「首飾り」を筆者が授業で取り上げようと考えたのは、よく参照される短編小説であることに加えて、①初学者にも叙述の操作がわかりやすいこと、②ストーリーそのものも複雑ではないこと、③いま述べた2つの理由によって「オチ」を考えさせる具体例として適切であること、という理由による。また、学生にすでに読ませたハルフォン「彼方の」では、モーパッサンにも言及があり、それも「首飾り」を取り上げた派生的な理由である(「彼方の」では、モーパッサン「オルラ」に言及がある)。授業では、高山鉄男の訳文を用いた(5)。

６．授業の狙い

授業の目標は、次のように設定した。

①小説の「オチ」とは叙述の操作（情報伝達の操作）に関係するものだ、ということを、「オチ」の創作文執筆を通じて、主体的に理解させる。

②「首飾り」という小説の「オチ」をひとつの「具体例」として捉えさせ、そこから「オチ」を定義させる意見文を書かせることで、学生に「具体例　→　定義」という帰納的発想を促す。

③それらの文章を授業受講者全員で読みあい、回答の多様性、言葉の揺れを共有する(似たことを述べるひとがいても、まったく同じ回答はひとつもなく、言葉はそれぞれ微妙に揺れるさまを全員で共有する)。

④モーパッサン「首飾り」を読んだあとの眼で見ると、先行するシャルル・ペロー「サンドリヨン」(シンデレラ)の主題的継承と変奏が見られること、他方、叙述の意識は大きく異なることに気づかせる。

⑤アリストテレス『詩学』や漱石の講演録を用い、②で述べた「具体例　→　定義」の帰納的理解を発展させる。

⑥以上のすべてを、教師・受講者ともに楽しみながら行う。

上記の狙いのうち、①②③⑥は基本的な目標、④⑤は発展的な目標である。

７．　授業展開

以下、モーパッサン「首飾り」の授業展開を、こちらの提示した課題に学生がどのように答えてくれたのかを具体的に示しながら、述べていく。

7 - 1. 第１回目(90 分)

「首飾り」の結末は、具体的には以下のような文章である。

> フォレスティエ夫人は、はたと足をとめた。
> 「すると、あたしの首飾りの代わりにするために、べつのダイヤモンドの首飾りを買ったとおっしゃるの？」
> 「そうよ。気がつかなかったでしょう。ほんとにそっくりでしたもの」
> こう言って彼女は、いかにも誇らしげな、嬉しそうな様子で、にっこり笑った。

フォレスティエ夫人は、よほど感動したとみえ、友達の両手をつかんだ。

「可哀相に、マチルド。あたしの首飾りは偽ものだったのよ。せいぜいで 500 フランのものだったのよ……」(6)。

上記の結末部のうち、最後のフォレスティエ夫人の言葉を抜いた本文プリントを、あらかじめ初回の授業の前に、筆者は作成しておいた。

授業では、まず、机を教室後方に下げさせ、椅子のみで車座になった。そして、学生のなかにこの小説の結末を知っている者がいた場合、「オチ」を周りの学生に言わないように注意しておかなければならないので、読んだことがある人はいるか、と学生にまず尋ねた(全員にとって未読の小説であった)。

この点を確認したうえで、準備した本文プリントを受講者に配り、モーパッサンがどのような作家であるかを簡単に説明した。ついで、受講者各自に一段落づつ、順番に音読をしていってもらい、わかりにくいと思われる個所などに適宜解説を加えながら、70 分ほどかけて、作品を読んだ。

そのうえで、残りの 20 分を用いて、原稿用紙を配り、「この小説は、フォレスティエ夫人の言葉が 3 つの文で描写されて終わる。とても「オチ」らしい「オチ」である。モーパッサンは、どのような「オチ」を書いたのだろう？　どのような「オチ」でこの小説を終えるとおもしろいのだろう？　3 つの文章、200 字以内で描写してみてほしい。書いてくれた文章は、来週、クラス全員で読みあうのでそのつもりで書くように」と学生に指示した。書けた者から退出してよい、とも告げた。指示が理解できない学生や、書くのに困った様子を見せた学生は特になく、全員が時間内に書き上げ、提出してくれた。

終了後、創作文を確認したが、多くの学生が、よく考えられたものを書き上げていた。

7 - 2. 第 2 回目(90 分)

2 回目の授業では、まず、前回と同じように、机を後ろに下げ、椅子のみで車座になってもらった。そして、授業の最初に、モーパッサンが書いた本来の「オチ」がどのようなものであったかを学生に明かした。

そして、あらかじめ用意しておいた、初回の授業で執筆させた全員分の創作文をまとめて印刷したプリントを配った。創作文の内容によって、4 つのグループにあらかじめ筆者は整理しておいた。そのうえで、学生全員の「オチ」を、ひとりづつ指名し、音読してもらい、ひとつひとつにコメントをした。また、モーパッサンの書いたものが「正解」というわけではなく、「オチ」とはなにかを思考するための実験だということを強調して言った。以下に、実際に学生が創作した「首飾り」の「オチ」を全員分(出席者 16 名分)、示す。

受講学生の「首飾り」のオチ創作文まとめ

〈1．モーパッサン直系の「オチ」〉

① 「あの首飾りはにせもので、箱だけ変えてあったの。ありがとう。首飾りをほんものに変えてくれて。」

② 「あれはにせもののダイヤモンドで作った首飾りなの。だからあなたは、私にほんものの首飾りを下さったことになるわ。10 年も苦しい生活をしてまで、私に首飾りをプレゼントしてくれて、どうもありがとう」

③ 「実はマチルドに貸した首飾りは、ほんものに似せたにせものなの。箱はほんものだけど。よく頑張ったわね」

④ 「実はあの宝石は、にせもののダイヤモンドでつくった首飾りなのよ。あなたに見破られるのではないかとひやひやしていたわ。でも嬉しいわ、今度あの首飾りをつけてみましょうかしら。」

〈2．マチルドにあげてもよかった、という「オチ」〉

⑤ 「それは悪いことをしたわね。でもあれは、あなたにあげるつもりだったの。ごめんなさい」

⑥ 「ダイヤモンドの首飾りは、今も大切に使っているの。けれど、あの首飾りは、今のあなたにとても似合うと思う。だから、あの首飾り、あげるわ」

⑦ 「素晴らしいわ、マチルド。あなたのような方が水仕事とはさぞ大変だったでしょう。その頑張りを讃えて宝石をあげるわ」

⑧ 「まあ、今になってわざわざその話をして下さるのね。驚いたわ。親友なのだから言って下されば、返してくれなくてもよかったのに」

〈3．首飾りを確認していなかった、という「オチ」〉

⑨ 「まあ、なんてことを！　でもなくしたと言ってくだされば、そんなに無理をして返してくださらなくってもよろしかったのに……。折角でしたら首飾りをお譲りしましょうかしら？　まだ箱に入ったままあると思うわ」

⑩ 「実はあの首飾り、模造品だったのよ。なのに、ほんものの ダイヤモンドにしてくれていたなんて……。あれから箱をあけていなくて気づかなかったわ……」

⑪ 「あんな首飾りのためにわざわざそこまでして下さ

ったのね。あれ以来、あの箱をあけていないから帰ったら見てみるわ」

⑫ 「わざわざ10年かけてまで払ってくれるなんて。あれから1度もつけたことはないのに。あなたは素晴らしい友人だわ。」

〈4．その他の「オチ」〉

⑬ 「あら、自分の身を削ってまで、私のことを気遣ってくれていたのね。でもいいのよ、あんなダイヤモンドひとつくらい。あなたたち下層の人たちにとっては手に入らないものかもしれないけれど、私にとってはたくさんあるものなんだから。」

⑭ 「あれほど幸せな顔で夜会に行きたがっていたのに、こんな顔になってしまって。そうだわ、マチルド。私の女中として働かない？」

⑮ 「……。(ごめんね、マチルド。あなたが首飾りを買った宝石屋は、わたしとグルなのよ)。」

⑯ 「なんの話？　あなたは私に首飾りなど借りてはいないわ」

以上を受講者全員で共有する作業を授業前半45分を用いておこなった。ひとりひとりに簡単なコメント・質問を好意的に投げかけるようにし(実際にどれもおもしろい回答だと筆者は思った)、否定的なコメントや文章添削などは極力しないようにした。

授業後半45分では、机をもとに戻させ、「首飾り」という小説を「具体例」にしながら、「オチのある話とはなにか」というテーマで新たに意見文を書かせることとし、次のように指示した。「モーパッサン「首飾り」のオチは、「うまいオチ」だと思ったか、それとも「決まりすぎているオチ」だと思ったか。自分の立場を明確にしたうえで、「オチのある話」とはなにかを自分なりに明確に定義すること。また、自分の定義に照らして、モーパッサン「首飾り」の最後は、具体的にどのようにオチになりえているのか述べてほしい。以上の論点を含む常体の文章を800字以内で書くこと。タイトルは、自分の定義がタイトルを見ただけでわかるように、要約的につけること。前回と同様に、この文章は受講者全員で読みあうのでそのつもりで書くこと」。

こちらの課題では、数名、文章作成に苦労している学生も見られ、授業時間が終了してもまだ書いている学生もいたので、授業終了後も少し待った。結果的には、出席した学生はこちらの課題も全員が提出した。

授業終了後に確認したところ、筆者の予想を超える水準のものが多く、感心した。

7-3. 第3回目(90分)

3回目の授業前半では、前回までと同様に机をどかし、車座になり、まず、前回、どちらかの立場を明確にするように求めた問題、「首飾り」の「オチ」を、うまい「オチ」だと考えるか、決まりすぎている「オチ」だと考えるかの集計を発表した。前回出席者18名中、「首飾り」の「オチ」はうまいと考えた学生が14名、「首飾り」のオチは決まりすぎだと考えた学生が4名で、もう少し拮抗する意見になるかとも筆者は予想していたが、「うまい」と考える学生が多数派という結果になった(教材を批判的に書くことを避ける無意識が学生にあるのかもしれない)。

そのうえで、前回の授業後半で書いた意見文「オチのある話」とはなにか、を各自に音読してもらった。前述のように、総じて意見文のレベルは高く、ユーモアのある文章を書いてくれた学生もおり、こちらも楽しく授業を運営できた。本来であれば、学生全員のものを示したいところだが、紙数の関係で、「決まりすぎ」という意見の学生から2名、「うまい」という意見の学生から3名、以下に例示し、授業で行った筆者のコメントを添えて提示したい（主述関係などをリライトした部分もあるが、ほぼ学生が書いたそのままの文章である、また「筆者のコメント」のうち「※」が付されている部分は、授業時ではなく、現時点での筆者のコメントである)。

まず、「首飾り」のオチは決まりすぎである、という意見をもつ学生2名の文章を見てみよう。

学生の書いた定義文A　オチと生きてきた大阪人

オチのある話とは、話の解釈が最後の最後にくつがえることである。大阪人は、「オチのある話」のことをフジテレビの「すべらない話」で話されるようなものだと勘違いしている。かならずしも、笑いを生む話が「オチのある話」ではないことを理解していない。

今までの話の流れ、文章や映像から予想できる結果が裏切られることこそオチだと考えられる。逆に「オチのない話」とは、聞き手が「ああ、なるほど」などというように納得してしまうもののことである。

モーパッサンの「首飾り」はオチのある話だ。読者は、まさかあの首飾りがにせものだったと思うはずがない。それもわずか500フランである。この話は、読み終えたあと、ツッコみどころ満載なのである。

オチには、上手なオチとさほどだなと思うオチがある。「首飾り」については、オチ自体は、きれいにオチていたと思う。しかし、オチという文化に慣れている私には、少し予想がついてしまうように思った。自分が予想した

オチを上回るオチであってほしかった。

筆者のコメント①　「オチのある話」は笑話をかならずしも意味しない、予想を裏切るものがオチであり、納得の感覚が与えられるものはオチではない、という指摘は鋭いと感じた。これとは正反対に、納得の感覚を与えるものがオチである、という意見を書いた学生もいた。「大阪」の地域性を生かした批評に読める点もおもしろい。
※むろん、「まさかあの首飾りがにせものだったと思うはずがない」と書く一方で「少し予想がついてしまう」という結論は矛盾しているが、ここは強く指摘せず、学生に軽く質問するにとどめた。

学生の書いた定義文Ｂ　オチのための伏線

「オチ」とは、話の最後の場面で一気に落差をつくり、話に対する印象を強める効果を持った、ひとつの手法だと思う。そして、オチに至るまでの物語は、伏線をはるための装置で、話自体の主役はオチである。

フォレスティエ夫人の最後の言葉は、必死で働いてきたロワゼル夫妻の10年間をまったくの無意味に変えるもので、借金を完済し、満足と充実感を覚えているロワゼル夫人を一瞬で絶望させるという意味でオチになっている。もしも最後の場面のフォレスティエ夫人の言葉のあとに、ロワゼル夫人の絶望した様子が描写されて、その後の彼女の生活まで描かれたら、それは一種の過程になり、オチではなくなってしまう。あくまでも話の最後に、伏線をすべて回収して落差をつけるのがオチだと思う。

「首飾り」のオチは、比較的ありがちで、わかりやすいと私は感じた。短編だと伏線の密度が重要になるので、伏線がもっと見つけにくく、読了したあとに再度読み直し、新たな伏線に気づけるようなものが好きだなと思った。

筆者のコメント②　叙述のひとつの技術が「オチ」をつくる、という把握をしている点が貴重。特に、「首飾り」はあの描写で終わることで「オチ」になっているのであり、「その後」が書かれてしまえば、それは「オチ」ではない、という見解は、おもしろい。再読の際に、文章の意味が変化する、という点に言及があるのもよい。
※この学生の「首飾り」のオチへの論難は、どこか後述の夏目漱石の「首飾り」評とも通じるところがあり、その点は、次回の授業で言った。

ついで、「首飾り」のオチをうまいと感じた学生３名の意見文を見てみよう。

学生の書いた定義文Ｃ　文章の見方を変える「オチ」

「首飾り」のオチが、それまでに文章に書かれたことを皮肉に変えた部分を挙げていく。10 年かけないと返し終わらないほどの借金をして買ったものが、本当は 500 フラン程度で買えるものだった、というのがおそらくもっとも大きな「皮肉」のひとつだろう。

また、そのにせもののダイヤの首飾りをほんものと勘違いしたロワゼル夫人の観察力、すなわち、見た目のみ見て本当の価値に気づけない夫人の愚かさが、フォレスティエ夫人の最後のことば「かわいそうなマチルド！」につながっているように思える。

同時に、「せいぜい 500 フラン」という首飾りのほんとうの値段が、夜会に行くために買ったロワゼル夫人のドレスの値段、400 フランと対応していて、ロワゼル夫人が人前に出るのに恥ずかしくないと思った衣服よりレプリカの首飾りの値段のほうが高い、といった皮肉が成立している。

また、夫・ロワゼルが青ざめるほどの額である「400 フラン」が、フォレスティエ夫人からすると「せいぜい」とはした金のように言われる「500 フラン」以下だというのもひとつの皮肉になるだろう。

自分は、「首飾り」のオチをうまいオチだと思う。物語のひとつの大きな結論にもなっており、その大きな結論から、解釈が肉付けされ、それまでの文章に一味も二味も加えているからだ。

「オチ」とは「今までのストーリーの流れを無駄にすることなく、流れに別の意味を持たせ、同じ話を二度目に読む（または聞く）とき、違った見方ができるもの」と定義できると考える。

筆者のコメント③　批評として、具体的で立派に書けていると思った。特に結末の「500 フラン」という具体的な金額が、ロワゼル夫妻が物語冒頭で無理をして出したドレスの金額「400 フラン」より 100 フラン多いことの皮肉を捉えているところは、とてもよい。最後に、フォレスティエ夫人が具体的に「500 フラン」と金額を言うように書かれた意味がうまくつかまえられている。また、「オチ」は、再読の際に文章の意味を変えていく、という点に言及しているところもよい。

学生の書いた定義文Ｄ　オチとは読者を裏切ること

「オチのある話」とは、読み手の予期する結末を裏切るような話だと考える。二つの例を挙げる。

Ａ「この前帰り道で、お父さんによく似たひとが歩いてて、「お父さん！」って呼んだら、ほんまにお父さんやってん。仕事がはやく終わったってお父さん言ってた」

B「この前帰り道で、お父さんによく似たひとが歩いてて、「お父さん！」って呼んだら、その人が振り向いてん。お父さんじゃなくて、そのひと、藤原校長やってん！」

Aの話では、話の聞き手は、おそらく、仕事帰りの父に下校途中会った理由が予想できたのではないかと思う。そのため、Aの話はオチのない話である。

Bの例では、父だと思ったひとが実は藤原校長であった、という予想しない結末で終わる。これは、オチのある話である。

モーパッサンの「首飾り」では、ほんものだと思っていたダイヤモンドの首飾りが、実はにせものだったという結末で終わる。前回の授業で、結末をみんなで予想したところ、作者と同じ結末を思いついた人もいたので、オチのある話とは言えないかもしれない。

しかし、オチのある話には、それが現実的であるか、ということも重要だと考える。モーパッサンの「首飾り」は、予想可能であるという意味ではオチのない話かもしれないが、人物描写の鋭さ、スリリングな展開、あっけない終わりなど、オトされていることを楽しめるおもしろい小説である。

筆者のコメント④　例示があるところがよく、おもしろく読んだ。「読者の予想を裏切ること」と「リアリズムある展開」という、見ようによっては相反するものを両立させながら「オチのある話」をしなくてはいけないので難しい、と指摘しているように読め、おもしろい。

※なお、文中に登場する「藤原校長」とは、大阪府立大学工業高等専門学校の現在の学校長・藤原徳一先生である。蛇足ながらこの文章を書いた学生に確認したところ、「藤原校長」と「お父さん」は「実際には後ろ姿もまったく似てないです」とのことであった。

学生の書いた定義文E　**オチとヒント**

「オチのある話」とはその話を知らない第三者にとって、予想外の結末があることである。すると、「オチのない話」とは、想定内の話のことをさすことになり、これはおもしろくない。

「首飾り」の結末はフォレスティエ夫人がロワゼル夫人に貸したダイヤモンドの首飾りがにせものであるという話だった。このオチにいくまでの文章には、ロワゼル夫人を描写した部分が多く、フォレスティエ夫人がにせものの首飾りを貸したことは結末以前には書かれていなかった。つまり、首飾りがにせものだと知らないロワゼル夫人の姿を中心に描くことで、読者であるわたしたち、第三者にとってはオチになったのである。

さらに、文章のなかにヒントも隠されていた。こうしたヒントは、オチを知ったあとに文章を読みなおすと、おもしろい。うまいオチの話とは、オチにつながるヒントがところどころにちりばめられた話なのかもしれない。

以上を踏まえて、「首飾り」はうまいオチだと私は思った。文章にはオチにつながるヒントがあり、オチは文章の途中では気づかないものであり、予想外だったからだ。

筆者のコメント⑤　この文章もまた、叙述の操作こそが「オチ」を決定する、という発想をしているところがよい。結末に近い部分では、意識的に読者が「ロワゼル夫人」の視点に誘導されているので「オチ」が「オチ」たりえる、という観点が出ているところも非常によい。

上記で例示してみたのは5例にとどまるものの、すべての学生が、「オチのある話」とはなにか、という問題について、筆者があらかじめ予想した水準以上の文章を書いており、ひとつひとつの文章を全員で読みあうことで、「オチ」についての異なる切り口をクラスで共有できた。

授業の後半45分では、次回の発展の準備として、「モーパッサン「首飾り」の話は、わたしたちがよく知っている昔話のひとつに似ていないだろうか？」という問いを発した。残念ながら、誘導したい答えは出なかったので、「「シンデレラ」に似ていないだろうか」と筆者は自分で言った(言うと、ああ、という声が学生から漏れた)。

そして、ふだんは入りこむことのできない夜会が舞台となること、そこで夢のような時間を過ごすが現実に戻らねばならないこと、両者ともに享楽が「借り物」によって成立する物語であり、さらに言えば、「ほんもの」と「にせもの」をめぐる逆転の物語であること(他方では、魔法によって与えられた「にせもの」のガラスの靴が、「ほんもの」の妃となる資格を担保し、他方では、実際は「にせもの」であるダイヤモンドの首飾りを「ほんもの」と思い続けたことが徒労の種となる、また「首飾り」の文章では明示されないが、「にせもの」の首飾りとは、つまり「ガラス」の首飾りではないのか)、こうした「シンデレラ」の主題的継承と変奏が、明確にそこには見られないだろうか、と話した。

以上のことを話したうえで、シャルル・ペロー「サンドリヨン または小さなガラスの靴」(1639)の文章を学生に配布し、これもふたたび、学生に一段落づつ読んでもらった(7)。次回、ペローに言及することを予告し、第3回目の授業を終えた。授業を終えたあと、受講学生のひとりが「シンデレラの物語とは、夜会の帰りになにかを落としてくる、というところも同じですね」と筆者に言ってきてくれた。指摘の通りであり、言い落していた点だったので、次回の授業ではこの点にも言及した。

7-4. 第 4 回目(90 分)　まとめと発展

最後となる第 4 回目の授業は、夏休みの課題指示などに最初の 10 分程度を使った。よって、ここで報告する授業にあてた時間は、80 分程度である。

7-4-1.「オチ」をめぐるまとめ

筆者は、これまでと同様に、椅子のみで車座になり、まず、復習のために「首飾り」の本文(「オチ」の部分も加えた完全な本文)を 15 分ほどかけて段落ごとに学生に音読してもらった。そして、A3 用紙 2 枚のプリントを配り、まとめに入っていった。

さいしょに、「7－2」で展開した授業で学生たちが書いた「オチ」の定義をめぐる作文から、全員の定義部分を抜き出したものをプリントにまとめておき、学生とともに振り返ってみた。次のようなものとなった(抜き書きに際しては、若干のリライトを加えた)。

受講学生による「オチのある話」定義まとめ

①ストーリーの伏線を回収した、やや皮肉な結末を持つもの
②予想できる結末を裏切るもの
③物語の進行に伴い盛り上がったボルテージを急激に落とし、その違和感で読者を楽しませるもの
④物語の中盤で明らかにされていない、または意図的に隠されたことを結末で明かすもの
⑤伏線を明らかにして結末とするものと、それまでの物語の流れをひっくり返すものの二種類ある
⑥物語の最後で読者を驚かし、快感を読者に与えるもの
⑦なんらかの「納得」の感覚を読者に与えるもの
⑧物語のそれまでとつながりながらも、読者の考えの裏をかくもの
⑨最後の結末がそれまでの過程に深く関わり、文章全体に意味をもたせるもの
⑩それまで述べた出来事の羅列に「結果」を与え、出来事に意味を与えるもの
⑪感動もしくは驚きを与え、「その後」を読者に想像させるもの
⑫読者が予想しえない奇想天外な結末を持つもの
⑬それまでの物語が報われるか、否定されるもの
⑭最後の場面で一気に落差をつくるもので、話の主はオチにあり、オチで話が終わることが大事
⑮話全体の流れを生かしながら相手を納得させるもので、オチで話が終わることが大切
⑯読み手の予期する結末を裏切るような話
⑰話が想定内にとどまらず、「読者がなにを知らないか」を生かして予想外の結末をつけること
⑱話の展開に別の意味を持たせ、再読する時に、文章への別の見方を生むもの

筆者は、それぞれおもしろい論点を含んだよい定義であり、「間違い」はひとつもないことを学生に伝え、定義で出てきた言葉のうち、「読者を裏切る」「予想外」など、複数の定義で登場したものに注意をうながした。そのうえで、「読者を裏切る」ような「予想外」の「オチ」はどのようにすれば生まれるのか、と問いを投げかけた。

そして、配布プリントに挙げておいた、「首飾り」の小説内で起こる出来事を時系列的にまとめた部分(本論「5. 教材」で示したようなもの)を見るように言い、フィクション内部の重要な情報をどのように作者が読者に提示するかのひとつのかたちが「オチのある話」である、と説明した。「オチ」の定義まとめの④や⑰の学生が言ってくれたように、「オチ」とは一連の出来事を「どう書くか」に関係した問題だ、という点を強調した。

具体的には、「首飾り」において、首飾りを借りる場面で、それがにせものであることを知っているのは、フォレスティエ夫人と作者、そして物語を再読する読者だけなのであり、ロワゼル夫人と初読の読者は、それを知りえない。また、ロワゼル夫人がフォレスティエ夫人に渡した首飾りが、最初に借りた首飾りと異なるものであったことは、ロワゼル夫人、作者、すべての読者が知っており、フォレスティエ夫人だけが知らない。このような叙述（書き方）によって、「オチ」は準備されており、結末部では、ロワゼル夫人と初読の読者とが、もともと借りた首飾りがイミテーションであった事実を同時に知ることになる、と説明した。

次に、「オチ」があのようなものであることで、結末以前に述べられていた物語の細部が意味づけられることが広義の「伏線」である、という話に移った。

第 3 回めの授業報告のなかで挙げた、定義文 C の学生が詳しく指摘してくれたように、たとえば、フォレスティエ夫人のいちばん最後の言葉、「せいぜいで 500 フランのものだったのよ……」に注意を喚起した。全体的に、モーパッサン「首飾り」は、さまざまなものの値段への言及が多い小説だが、この「500 フラン」はどのような意味を持つのかを再考させるため、配布プリントに筆者がまとめておいた値段表を見るように、学生に言った。次のようなものである。

「首飾り」における、ものの値段描写のまとめ

①400 フラン(贅沢ではないがそんなに悪くないドレス)、

②400 フラン（猟銃 1 丁）、③10 フラン（素晴らしいバラ 2 本か 3 本）、④40000 フラン（無くした首飾りにそっくりな首飾りの定価）、⑤36000 フラン（ここまでなら値引きしてもよいと宝石商が示した値段）、⑥34000 フラン（もしももとの首飾りが見つかった時に宝石商がひきとってくれるという値段）、⑦18000 フラン（夫ロワゼルが持つ父の遺産）、⑧1000 フラン、500 フラン、100 フラン、60 フラン（あちこちからする借金の額）、⑨5 スー（夫が筆耕のアルバイトをする際の 1 頁あたりの賃金、※20 スーで 1 フラン）、⑩「せいぜいで 500 フランのもの」（本当の首飾りの値段）

このように可視化したうえで、学生がすでに鋭く指摘してくれたように、「せいぜい 500 フラン」という最後の言葉には、皮肉が隠されている、ということに話を及ばせた。つまり、「せいぜい 500 フラン」は、物語冒頭で夫婦がやっと出した衣装代、400 フランより少し高い。のみならず、それは、「にせもの」の首飾りの値段として「オチ」に登場するので、ロワゼル夫妻の 10 年の日々をめぐる痛烈な皮肉となる。もし、「オチ」に「せいぜい 500 フラン」という言葉がなければ、冒頭の「400 フラン」という描写がこのような意味を持つことはないだろう（「オチ」にこの言葉がなければ、冒頭の「400 フラン」を読み飛ばすひともきっと多い）。また、柏木隆雄のように、これは、フォレスティエ夫人のブルジョワ的俗物性への皮肉と読める、とする見解もあり、この点も授業で話した(8)。

このように「オチ」がどのように書かれるかによって小説の細部が持つ意味が変化するのであれば、違う「オチ」だったらどうなるだろうか、とさらにこの話題を展開させた。第 1 回の授業で、学生たちが書いた「オチ」の中には、「10 年間、フォレスティエ夫人は、首飾りを一顧だにしなかった」というタイプの「オチ」を考えた学生も数名いたことは前述した。これを学生に思い出させるようにした。そして、このタイプの「オチ」もなかなか見事だ、と再度、褒めた。ロワゼル夫人が代わりの首飾りをフォレスティエ夫人に渡したときに確認しなかった、という場面を伏線に変えた「オチ」になっているからであり、この「オチ」の場合、その場面に光があたる、と説明した。

また、「オチ」をどのように書くかによって、小説作品は、いかようにも姿を変えることをより強調して教えるために、筆者は次のような話もしてみた。

もしも、この話を幸福な結末に書き換えるとしたら、どのようなものになるだろうか。そう考えるとき、さほど前景化してはいないものの、この物語のなかには、「一致団結する夫婦」というモチーフが確認できないだろうか、と話した。つまり、物語冒頭を振り返れば、虚栄心の強いロワゼル夫人は、結婚生活に満足しておらず、夫にも不満を持っていた（内心バカにしているように読める）。つまり、ロワゼル夫人には、人生の目的がおそらくなく、生活への不満だけがあるように描写されている。だが、借金を返す 10 年の時間はどうだっただろうか。ロワゼル夫人が首飾りをなくしてからの夫は、テキパキと物事に対処し、頼もしさを増すように描かれる。夫婦がはじめて、共通の目的（18000 フランの借金を返す）を持ち、一致団結する時間がこの 10 年間だと考えることはできないのだろうか。そのように考えるとき、モーパッサン「首飾り」よりもずっとあとの物語だが、メーテルリンク「青い鳥」のように、物質的に得るものはなかったが幸福の価値に気づいた、というように「オチ」を書き換えることもできるのではないか、という話もしてみた。

このようなまとめを 20 分ほどかけて行い、残り 45 分で、発展的な話題に入った。

7-4-2. 発展　「サンドリヨン」から「首飾り」へ

これまでの授業展開では、モーパッサンの短編小説の「オチ」について、文学史的な側面をほとんど語ってこなかった。よって、後半の授業では、まず、配布プリントに引用しておいた柏木隆雄の次のような文章を学生と読んだ。新聞というメディアが小説を変化させていった過程をひとまず学生にイメージさせたい、という理由による。

> 短編というものの、いわゆる「オチ」が、いわば一種のどんでん返し、あっと驚くような結末であるのは共通の理解のように一見思われるが、18 世紀のディドロなどの短編はともかく、「短編小説」が小説の有効な 1 ジャンルとして確立することになる 19 世紀の初め頃に名手と謳われたプロスペル・メリメの作品を読んでみると、必ずしもいわゆる「オチ」が際だっているわけではない。(中略) むしろこうした「オチ」は 19 世紀後半、小説が商業的な産物となり、読者の消閑の具となりつつあった小説、短い時間でぐいぐい読者をひっぱったあと、さっと「オチ」を示して読者をあっけにとらせながら終わる、というスタイルが流行し始めたように思われる。なかでもモーパッサンは 300 篇にも及ぶその短編作品の中で（メリメと違ってその精粗の差はかなり大きいが）主に見られるもので、そのこともまたモーパッサンと

いう作家の全体像についても示唆的なものがあるかもしれない。(9)

初学者には、文学史的な側面をまず授業の最初に教えるよりも、創作文執筆などによってなんらかの主体的な関わりを学生と作品との間に構築したあとに言及するのが効果的なのではないか、と筆者は考える。よって、まとめの段階でこの文章を取り上げた。

新聞の読み物としてわかりやすいオチを積極的につくろうとしたのがモーパッサンであり、「首飾り」という小説もそうした歴史的経過の産物という側面を持つ、と学生には説明した(新聞の歴史などにも多少言及した)。

そのうえで、前回の授業(第 3 回目の授業)の最後に読んだシャルル・ペロー「サンドリヨン または小さなガラスの靴」を思い出すように言った。

多くの小説は先行する物語から有形無形の影響を受けつつ書かれることを、それまでの授業で学生に強調して言ってきた。モーパッサン「首飾り」は、おそらくは、シャルル・ペロー「サンドリヨン または小さなガラスの靴」の二次創作（パスティーシュ）という側面があることをふたたび主題論的に強調した(10)。「首飾り」前半で、ロワゼル夫人が夢想する物語があったとしたら、それは「サンドリヨン」であり(とはいえ、むろんロワゼル夫人は既婚だが)、「サンドリヨン」のリアリスティックな書き換えという意味が、併読すれば確認できる。仮にモーパッサンにそのような意識がなかったとしても、当時の読者にはそのように受け取られたのではないか、と説明した。そして、そのような意味でも、「首飾り」の物語展開は大きな皮肉になっているのではないか、と学生に話した(シンデレラストーリーなどこの世にはなかなかないのだ、という皮肉)。

つぎに、主題の類似と転換がそこに見られるとしても、叙述の意識(これが「オチ」に関係する)の面で、150 年ほど隔たったこの 2 つの物語は大きく異なっていることに、学生の注意を向けさせた。「首飾り」を読んだ目から、「サンドリヨン」を見ると、秘密(ガラスの靴を落としたのがサンドリヨンであること)があらかじめ読者に明示されている物語であることに気づかないだろうか、と学生に問いかけた。「サンドリヨン」の物語のなかでは、靴を落とした女性の正体がサンドリヨンであることを知らないのは、王子や彼女の義姉妹といった登場人物の側であり、読者の側は、そうした登場人物の未知を共有していない。他方で、「首飾り」では、ある登場人物(ロワゼル夫人)の未知(首飾りがにせものであることを知らない)を読者は、作者の叙述によって共有し、それこそが「オチ」をかたちづくっている。

仮に、ペロー的叙述によって、「首飾り」が書かれたならば、ロワゼル夫人がそれをはじめに借りた段階で「ところがこの首飾りは、にせものであった」という文が挿入されるはずであり、他方でモーパッサン的叙述によって「サンドリヨン」が書かれるなら、靴を落とした女性の正体を最後まで明かさず、その謎が解明される場面で物語が終わることになる、と学生に話した。

以上のように、「サンドリヨン」の文章も学生に読ませ、主題や叙述について対比的に思考させたことで、「オチ」をめぐる歴史的な理解が深められたのではないかと筆者は考えている。

7-4-3. 発展　アリストテレス『詩学』、漱石の論難

最後に、授業 2 回目で行った、「オチのある話」とはなにか、という定義文からの文学史的発展として、アリストテレス『詩学』と、夏目漱石の批評文とを、受講学生と読み、授業の発展的まとめとした(11)。

まず、アリストテレス『詩学』は、世界でもっとも古い「ストーリー技術論」(物語をどうつくると面白いのかという議論）のひとつであり、ただし、当時は「小説」はまだないので、叙事詩や演劇を主に論じていることを学生に説明した。アリストテレスの論点のうち、「オチ」を考える上でおそらく重要になるのは、「逆転」（ペリペテイア）と「認知」（アナグノーリス）が起こる物語を、すぐれた悲劇として挙げているところだろうとしたうえで、アリストテレスの次のような文章を学生と読んだ。

> 行為の再現とは、筋（ミュートス）のことである。すなわち、ここでわたしが筋というのは、出来事の組み立てのことである(中略)これらのことに加えて、悲劇が人の心をもっともよく動かす要素は、筋を構成する部分としての逆転（ペリペテイア）と認知（アナグノーリシス）である。(12)

アリストテレスが、「物語」の「筋」とは「出来事の組み立て」なのだと言っていることを学生と確認し、どのような順番で、どのような出来事が物語の受け手に伝えられるかの伝えられ方こそが、物語の本質なのだということも説明した。そのうえで、もっともよい悲劇は、どんでん返し（逆転）が起こり、なおかつ、登場人物のひとりと観客が物語上の秘密を共有する瞬間（認知）がどのようにつくられているかに関係する、とアリストテレスが述べていることを確認し、「首飾り」のオチもまさにそうではないだろうか、と学生に問いかけてみた。また、

次のような部分も学生と読んだ。

> 筋には、単一なものと複合的なものがある（中略）複合的な行為というのは、その行為の結果として、認知あるいは逆転を、あるいはその両方を伴って変転が生じる場合である。さらに、逆転と認知は筋の組みたてそのものから生じるものでなければならない。すなわち、それらのことは、さきに生じた出来事から、必然的な仕方で起こる結果であるか、あるいはありそうな仕方で起こる結果でなければならない。なぜなら、ある出来事がある出来事のゆえに起こるか、ある出来事がある出来事のあとで起こるかでは、大きな違いがあるからである。逆転とは、上述のように、これまでとは反対の方向に転じる、行為の転換（メタボレー）のことである。しかもこの転換は、わたしたちがいうように、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こることが求められる。たとえば、『オイディープス王』は、ある男がやってきてオイディープスをよろこばせようとし、また母親に対する恐怖から解放しようとしたが、オイディープスの素性を明らかにすることによって、まさに反対のことを行った。(13)

上記アリストテレスの文章を学生と読み、ソフォクレス『オイディプス王』については詳しく解説したのち、「逆転」と「認知」が同時に起こるのがすぐれた「オチ」ということだろうか、と学生に問いかけた。

次に、夏目漱石は「首飾り」のオチをどう感じたのか、と話題を展開した。漱石は、第２回目の授業で各学生に示してもらった立場で言えば、「このオチ、決まりすぎ」という意見の持ち主であり、また、この「オチ」を「軽薄」「下品」であると考えていたことを説明し、次のような文章(講演の記録)を参照した。

> あなたの金剛石を弁償する為め、こんな無理をして、其無理が祟つて、今でも此通りだと、逐一を述べ立てると先方の女は笑ひながら、あの金剛石は練物ですよと云つたさうです。夫で御仕舞です。是は例のモーパツサン氏の作であります。最後の一句は大に振つたもので、定めてモーパツサン氏の大得意な所と思はれます。軽薄な巴里の社会の真相はさもかうあるだらう穿ち得て妙だと手を拍ち度なるかも知れません。それが此作の理想のある所で、そこが此作の不愉快な所であります。よくせきの場合だから細君が虚栄心を折つて、田舎育ちの山出し女と迄成り下がつて、何年の間か苦心の末、身に釣り合はぬ借金を奇麗に返したのは立派な心掛で立派な行動であるからして、もしモーパツサン氏に一点の道義的同情があるならば、少くとも此細君の心行きを活かしてやらなければ済まない訳でありませう。所が奥さんの折角の丹精が一向活きて居りません。積極的にと云ふと言い過ぎるかも知れぬけれども、暗に人から瞞されて、働かないでも済んだ所を、無理に馬鹿気た働きをした事になつて居るから、奥さんの実着な勤勉は、精神的にも、物質的にも何等の報酬をモーパツサン氏もしくは読者から得る事が出来ないようになつて仕舞ひます。同情を表してやりたくても馬鹿気てゐるから、表されないのです。それと云ふのは最後の一句があつて、作者が妙に穿つた軽薄な落ちを作つたからであります。此一句のために、モーパツサン氏は徳義心に富める天下の読者をして、適当なる目的物に同情を表する事が出来ない様にして仕舞ひました。同情を表すべき善行をかきながら、同情を表してはならぬと禁じたのが此作であります。いくら真相を穿つにしても、善の理想をかう害しては、私には賛成出来ません(中略) ゾラとモーパツサンの例に至つては殆ど探偵と同様に下品な気持がします。(14)

注意して読めば、ここに漱石の「誤解」が見られることを学生には言った。「首飾り」の結末部で、フォレスティエ夫人は、笑っているわけではない。なぜこんな誤解が起こるのだろうか、と学生に問い、前述の柏木の見解のように、フォレスティエ夫人の俗物性の問題としてこの「オチ」を漱石が受容していたかもしれない、と述べた。また、この講演で、文学が表現すべきものとして漱石があげるのは、①「美」、②「真」、③「善」、④「荘厳」、の４つであると解説したうえで、漱石の「首飾り」の「オチ」への批判とは、②、つまりリアリズムを強調するあまり、③を忘れた世界なのではないか、という批判だったと教えた。

このように、発展では、「オチ」というひとつの叙述の技術をめぐる文学史的見解を示して、まとめに変え、授業を終えた。

８．課題と展望

以上のように、創作文を執筆させ、受講者全員で読みあう実践には、確かな手ごたえがあったものの、当然さまざまな課題もある。まず、こうした方法をとろうとする際、きわめて単純に、受講学生の人数が問題になる。

一般的に、受講者全員の文章を全員で読み、共有する授業を行おうとした場合、20 名を超えると運営がむずかしくなる。また、今回は特にそうした問題は起きなかったものの、文章を全員に読まれ、コメントされる、という授業形式に忌避感を持つ学生が多ければ、こうした試みによって授業を活性化させようとする狙いは頓挫するどころか、逆の結果を生むだろう(教師の側が「添削」の意識を弱めることが重要となる)。

その一方で、文学作品への感想や批評を最初から学生に求めるのではなく、学生たちを創作者の側に一度置くことは、授業で取り上げようとする作品との主体的な関係があらかじめ結ばれるので、うまく機能しさえすれば、特に小説の技術論的理解には有効だと言える。今回の実践では受講学生に助けられた面がおそらく大きいので、今後とも継続的な実践を行いたい。

９．終わりに

本論では筆者が行った授業実践を、具体的に報告してきた。冒頭「１．はじめに」で述べたように、文学教育に創作文執筆を取り入れることは、授業を活性化させる有効な手段だと筆者は考えている(むろん、特に珍しい考えではない)。こうした考えから、今回の授業計画は、考案し、実践した。実際に創作文執筆を授業に取り入れてみると、準備の負担は多少あったものの、教師の側もまことに楽しかった。また、コメントシートなどから確認できる受講学生の反応も、かなり好意的なものが多かった。

筆者は、「首飾り」を教材とし、「オチ」をめぐる授業を行っていくうちに、授業もまた、起伏を意識し、なんらかの驚きを学生と共有しようとするものでなくてはならないと考えるようになった。授業それ自体に、「オチ」をどのように仕込んでいくかが、授業をたのしくするひとつの要点になるだろう。

注

(1)千野帽子『人はなぜ物語をもとめるのか』ちくまプリマー新書、2017

(2)エドワード・モーガン・フォースター、中野康司訳「小説の諸相」『E・M・フォースター著作集』8、みすず書房、1994、pp. 129-130

(3)エドゥワルド・ハルフォン、松本健二訳『ポーランドのボクサー』白水社、2016、pp. 7-39

(4) ボリス・トマシェフスキー他、水野忠夫他訳『ロシア・フォルマリズム文学論集』2、せりか書房、1995

(5)ギ・ド・モーパッサン、高山鉄男編訳『モーパッサン短編選』岩波文庫、2017、pp. 149-167

(6)前掲高山訳モーパッサン、p. 167、下線引用者

(7)シャルル・ペロー、新倉朗子訳『完訳　ペロー童話集』岩波文庫、2017、pp. 211-224

(8)柏木隆雄「モーパッサン『首飾り』を読む」『大手前大学論集』14、大手前大学、2013、 p. 100

(9)前掲柏木、p. 85

(10)なお筆者はフランス文学の研究者ではない。モーパッサン「首飾り」がペロー「サンドリヨン」の二次創作だということは自明に思えたので、授業ではそのように学生に教えてしまったが、最新のモーパッサン研究(あるいはペロー研究)において、この問題がどのように扱われているかについては、知識が不足している。また、むろん、ペローの「サンドリヨン」自体も、昔話の再話である。

(11)授業のこの部分でなにを取り上げるかについては、多少悩み、ベルクソン『笑い』や、桂枝雀による落語のサゲの分類の仕事に言及するのもよかったかもしれない。

(12)アリストテレース、松本仁助・岡道男訳『詩学』岩波文庫、1997、pp. 35-37

(13)前掲アリストテレース松本岡訳詩学、pp. 46-48

(14) 夏目漱石「文藝の哲学的基礎」『漱石全集』16、岩波書店、2003、pp. 112-116

参考文献

[1] 松本和也編『テクスト分析入門　小説を分析的に読むための実践ガイド』ひつじ書房、2016

[2] 千野帽子『人はなぜ物語をもとめるのか』ちくまプリマー新書、2017

[3]エドワード・モーガン・フォースター、中野康司訳「小説の諸相」『E・M・フォースター著作集』8、みすず書房、1994

[4] エドゥワルド・ハルフォン、松本健二訳『ポーランドのボクサー』白水社、2016

[5]エドガー・アラン・ポオ、中野好夫訳『黒猫・モルグ街の殺人』岩波文庫、1978

[6]ジェイムズ・ジョイス、結城英雄訳『ダブリンの市民』岩波文庫、2004

[7] ボリス・トマシェフスキー他、水野忠夫他訳『ロシア・フォルマリズム文学論集』2、せりか書房、1995

[8] ギ・ド・モーパッサン、高山鉄男編訳『モーパッサン短編選』岩波文庫、2017

[9] シャルル・ペロー、新倉朗子訳『完訳　ペロー童話集』岩波文庫、2017

[10] 柏木隆雄「モーパッサン『首飾り』を読む」『大手前大学論集』14、大手前大学、2013、 pp. 85-105

[11] アリストテレース、松本仁助・岡道男訳『詩学』岩波文庫、1997

[12] 夏目漱石「文藝の哲学的基礎」『漱石全集』16、岩波書店、2003

＊引用した学生諸氏の文章は、すべて転載許可を得ている。